『若きウェルテルの悩み』

経済学部経済学科３年　真野友華

『若きウェルテルの悩み』は、ゲーテによって書かれた書簡体小説である。本文は友人に向けて書かれたウェルテルの手紙という形で、ロッテという女性に恋をする様をはじめとしたウェルテルの日常と心情、そしてウェルテルがその生涯を自殺という形で閉じる場面までが綴られている。特にウェルテルの死までの数日間については、彼の手紙を集めた編者が語り部となり、その顛末を語っている。

元住んでいた土地を離れたウェルテルは新天地でロッテと出会い、それからしばらくは彼女に関する記述が続く。彼女の弟妹達と遊んだり、知り合いの看病に勤しむ彼女についていったりと、ウェルテルは彼女と様々に行動を共にし、思いを募らせてゆく。彼女に関わる記述とその他の記述との温度差たるや、なんとも分かりやすく微笑ましくさえある。

「これほどにも子供なのだよ！　ただ一瞥に恋い焦がれて！　これほどにも子供なのだよ！――われわれはヴァールハイムに行った。女たちは馬車で出かけた。そして、散策のあいだじゅう、私は心なしかロッテの黒い瞳の中に――。ゆるしてくれたまえ。もう本当の痴れ者だ、私は。君はまだあれを見ていないのだからなあ、あの目を！」

ちょっとしたときに視線が合わないことにさえやきもきし、自分をまるで子供のようだ、馬鹿みたいだと自嘲する様は、今を生きる私たちにも共感出来るものではないだろうか。
対して、ロッテのことから離れて書くときはあまりに淡々としている。 その口調は冷淡とさえ言ってもよいだろう。母が社会的活動を勧めている、と聞いたウェルテルが返した文面がこれである。

「世の中のことは、ついにはすべて愚劣の一語に帰着する。それが自分自身の情熱でもなく、自分自身の欲求でもないのに、他人のために、ただ金や名誉やそのほかのもののために、あくせく働き過ごす人間は、しょせんは愚者だよ。」

ロッテへの夢中具合と比べると、社会に対する目線の冷たさが際立つ。また、後半、ロッテやアルベルトの元を離れて公使と共に仕事をしているときには、官僚主義や階級に対する嫌悪を書き連ねていた。社会への不満や、上手くいかない仕事も、もしかするとウェルテルの辿る運命を決定付ける要素だったのかもしれない。

また、ロッテの婚約者であるアルベルトに対する感情も、複雑に描かれていて面白い。アルベルトと初めてあった際の手紙だけでも、ウェルテルはアルベルトにかなり好感を抱いていることが分かる。不機嫌であることをもっともひどい悪徳だとするウェルテルは、不機嫌さをめったに表に出さないアルベルトを気に入っていた。少し穿った見方をするならば、ロッテの許嫁であるからこそ、そして何よりも愛するロッテが好意を寄せる人物であるからこそ、アルベルトのことを褒めちぎっているともとれるのかもしれないが。彼自身もウェルテルのことを気に入り、３人は交流を深めて行く。
しかし、ロッテとアルベルトが結婚し、ウェルテルはその２人にとって自分が邪魔なのではないか、アルベルトもそう考えているのではないか、と疑念を深め、さらに様々な事件を経ることで、ついにウェルテルは自殺を選んでしまう。しかも使ったピストルは、旅行に出るから、と言ってアルベルトから借り受けたものであった。

ロッテは、ウェルテルの死の直前に彼に会い、死を選ぶかもしれない、という予感を抱いていた。しかしながら彼女は、ロッテが２人でウェルテルと会うことをよく思っておらず、また自殺を毛嫌いして

いるアルベルトにピストルを貸すな、と言うことは出来なかった。図らずも、彼女がウェルテルの背を押す形になってしまったのである。

ロッテはずっと、最後にウェルテルへとピストルを届けさせてしまったことを悔やみ続けるだろう。しかし、直接誰を傷つけたわけでも殺したわけでもない彼女は罪を償い清算することも出来ない。だからこそ、彼女はこれで一生ウェルテルのことを忘れることはなくなった。彼女はなにもかも忘れて、割り切って自分の幸せを追えるほど非情にはなれないだろう。ウェルテルはついに、ロッテにとって生涯忘れられぬ人間になることができたのである。

ところで、この物語はウェルテルが新天地へとたどり着いたことを伝える手紙から始まっている。実は最初の手紙は、一度最後まで読んでからもう一度読み直すとなんとも感慨深いものがある。
ウェルテルが故郷を離れた理由となったある事件が仄めかされているのだが、短い文章からうかがい知ることが出来るその構図は、ウェルテルがこのあと遭遇し、果てはその死の切欠となってしまう事件と似通っている。

「レオノーレにはほんとうにきのどくなことだった！　でも、私には罪はないのだよ。どうにも仕方はなかった。あのひとの妹の持っている独特の魅力が私には楽しかったのだが、そのうちにあのひとの心の中で私への情熱がきざしてしまったのだもの。」

いわゆる恋の三角関係であるのだが、ウェルテル自身にそのような気持ちはなかった。この文章の後にはもしかしたら知らぬうちに自分はレオノーレに気があるようなそぶりをしていたのではないか、全くの無罪ではないのではないか、と語る部分も見受けられるものの、手紙の他の部分では自分を苦しめるために運命が選んだような事件だった、と述べていたり、その苦しみでくよくよするのはやめて、過去のものとしていこうと決意を記していたりする。

このあと、ウェルテルはレオノーレと同じような立場に立たされることになる。

果たしてウェルテルは、それに気づいていたのだろうか。

『風土』

経済学部経済学科３年　真野友華

和辻哲郎が、ハイデッガーの『有と時間』(『存在と時間』とも称する）に刺激を受け、時間性ではなく空間性に重きを置いて人間存在の構造契機を解き明かそうとしたのがこの『風土』である。まず第１章で和辻の言う「風土」とは何であるかが述べられ、さらに第２章で風土を３つのタイプ「モンスーン」「沙漠」「牧場」に分けて解説している。また、モンスーン型風土についてはそこで見られる特殊な事例も第３章として個別に取り上げられている。そして、第４章「芸術作品の風土的性格」として、地域ごとの芸術の特色、そこから導きだされる人間の特色がまとめられ、最後に第５章で、これまでなされてきた風土学研究について改めて考察している。

ここで言う風土とは単なる自然現象のことではなく、自然現象と人間との関わりのことである。例えば第２章で分類されている風土の類型１つであるモンスーン型風土においては、自然環境とは湿潤をもたらすものである。湿潤は食料を作るための自然の恵みとして認識されるが、それとともに洪水や干ばつなどをもたらす脅威でもある。そうなると、モンスーン型風土の人間は自然環境を生きてゆくための恵みとして受け取るため、洪水などの脅威があっても対抗しようとすることはない。よって、それらに耐えようとする受容的・忍従的な構造を持つことになる。

同様な自然環境との関わりに基づき、他の２つも解説されている。著者自身が見たそれぞれの地域の様子、そして歴史的事実などに絡めた説明が豊富で、恥ずかしながら海外経験のない自分としては実感が持てたとはいえなかったものの、読んだ後は無性に旅行がしたくなった。中でも、「沙漠」の特徴として挙げられていた紺碧の空に興味を持ち、写真を検索してみると、確かに日本の空とは色が違う。そういった普段見慣れているものすら違う、ということが分かると、俄然風土というものが人間に与える影響は想像を超える大きさなのではないか、と考えることができた。

また、この『風土』において、もっとも興味深かったのは日本における「家」の論理である。ヨーロッパの集合住宅と日本の一戸建てとを比較し、日本の家には「うち」と「そと」という確固たる分け目が存在していることを述べている。ヨーロッパの家には靴を脱ぐ習慣がなく、建物と外との境目に日本ほどの強固さはない。その「うち」と「そと」の境目は、政治への関心という形でも表れるという。「そと」で行われている公共の政治は「うち」には何ら関係がない。家の庭と市が経営する公園、子供の不正と政治家の不正などが例に挙げられ、日本の議会政治が痛烈に批判されている。

「洋服とともに始まった日本の議会政治が依然としてはなはだ滑稽なものであるのも、人々が公共の問題をおのが問題として関心しないがためである。」(p. 248)

あまりに現在の政治無関心の問題に合致していて驚いた。章末の記述からこの文章が昭和４年、すなわち今から 85 年以上も前に書かれたことが分かる。昨今は若者の政治不参加、無関心が問題視されているが、なんのことはない、日本人は家の「そと」で起こる政治の問題、経済の問題に無関心だったのである。それも、１世紀近く前から。自らの住む場所にあるはずなのに、議会がどうにも遠く感じるのは、「そと」でやっているという意識が未だに強いからではないだろうか。議会政治というシステムそのものが、実は日本の風土には合わないのではないか、という示唆は、今こそ見直して然るべきものではないかと思う。

『月と六ペンス』

経済学部経済学科３年　真野友華

『月と六ペンス』は、モームによって書かれた小説である。ある画家の半生を垣間見た作家が主人公となり、彼をめぐる様々な出来事を回想しながら語る形を取っている。

最初に読んだとき、単純な話だが、ストリックランドという人物が謎すぎて、それだけでページを捲る手は止められなかった。彼に関連して次々と起こる出来事は何もかも不可解の一言に尽きる。突然 17 年も連れ添った妻、そして子供たちを素っ気なく捨てたことも。画家になろうとした切欠も。自らの才を認めてくれたひとの妻を寝取り、自らも破局したことも。ブランチが自殺した、とストルーブが「私」に伝えた時、思わず笑ってしまったことを覚えている。あまりに予想外だったためだ。自分が持つ常識は通じない。突拍子がなく、何が正しいとも、何が間違っているとも言えない。家族への不義が良いこととは到底思えないが、それだけのことをしてでもやりたいことをやり通したというのはとても羨ましいし、唯々諾々と人生を浪費するくらいならそれくらいの冒険はした方が人生楽しいだろう。なんとなく生きている感じが拭えない自分自身と照らし合わせると非常に心が揺らされる思いだった。

だが、ストリックランドはそのような冒険を望んでいるだとか、そんな月並みな動機で絵を描き始めたわけではなかったというのは、読み進めていけばすぐに分かることだと思う。絵描きになりたいだけだったのなら家族を何の前触れもなく捨て去る必要はない。しかしながら、家族を捨て去った後のストリックランドには何の感慨もない。不可解さは読み進めれば読み進める程深まるばかりである。

結局最後までストリックランドへの興味は尽きることがない。何故なら、「私」から示されるストリックランドの謎に対する答えと呼べるものはないからである。1 つ、答えと言えるかもしれないのは、「私」がタヒチでストリックランドの描いた果物の絵を観た後に心の中で呟くこのセリフだ。

「ストリックランドめ、墓まで秘密を持って行ったか、と思った。」（p.389）

ストリックランドは、少なくとも「私」には秘密を打ち明けることなく終わった、というのがここから分かる唯一の事実である。結局、ストリックランドの絵についても、分かるのは「私」が見た、とこの物語の中で語られている 2 回では、得体の知れない魅力と、技法の拙さが同居している、というところが関の山である。小説であるからこそ、その「得体の知れなさ」が無限に発展しているというのは、面白いと思った。誰にもこの「私」が見たストリックランドの絵を再現することは出来ない。それがより絵の不気味さ、未知の魅力を引き立てることになっていると思う。おそらくストリックランドの絵を見ても、私は芸術的なものを読み解く力を持っていないので、なかなか価値は分からないと思うが。この小説を読んだだけであれば、そのぞっとするような得体の知れなさは、ストリックランド自身の謎と相まってその絵に魅せられることができるというのも、不思議なことだと感じた。

とにかく、何度も読みたいと思える作品だった。